

ラ、乾がしねばまね時期だどごで、今頃だでばの。だわけ。しても、もすこしなれば、アギ…アギってもうわんつかなれば乾がしてきて、ウチさ運ばねばホラ、へばこんだまだいつかに、な、雨降るいになればタメイゲまだ水、出で来るはんで。だんでそういう風にして使ったんだ。」

▼（M氏の出身地である出精地区での話であるが）採取の中心となるのは男性であり、M氏の祖父だった。それは、切る経験を積み、道具を上手に使える人でなくてはならなかったからだという（次項参照）。M氏も子どものころに手伝った。——夫人（M氏）「（掘る人は）おじいちゃん。年いったふとが切って。オドゴの人だな。ほとんどな。うん。ずっちゃだねな。採るやづずっちゃだねな。どごでも。」「（家族で手伝うことは）ある。オラだづもやったはんで。」

採取法 ▼柄のついた平らな道具で切り取った。技術を要するため、年配の上手に道具を使える人でなければできなかった。サラケ1枚は1尺四方、厚さは10cmくらいの大ききで切った。最低でも1メートル以上は掘った。つまり、一カ所から3段以上掘ったのである。——夫人（M氏）「アレ、掘るえずあるだいな。こう、ひらべってえ。こうさ、あのアレつでるばって、柄つでるばって平べっていやづでさ。こう、そういうのあるだね。それで、こら、したんでじょんずでねばまねだね。トシいったふとでねばやえねえだね。」「（深さは）たげ掘るであな。1メーターぐれだば掘らさちゅうべの。な。3尺3寸それぐれでずと掘てるでねな。何でもこう、このぐらいのものが。1シャグぐれだばあるべえ。あれ、サラケ1めや。1尺四方。」主人（L氏）「厚さは10cmぐれだな。」主人「さあ、それ（一冬分の量）だば、そのエのふとのアレになるばって」

乾燥・運搬・保管 ▼掘ったものはその場で、つまり溜池の中で幾度となくひっくり返し、その後八の字に立てかけ、更に上下の向きを変えて、乾燥を促進した。乾燥しない状態、つまり「ナマの」状態では重たくて運べないので、よく乾燥させた。乾燥したのち、年配の人もちろん加わるが、若い人が中心になってショイコを使って運搬した。丸山溜池は見た目よりも奥まったところまで広がっており、遠い距離を運ぶのには苦労した。乾燥中に盗まれるということはなかった。——夫人（M氏）「したんでそれ乾がすに、そごさ置きばなしだばまいねべ。まだひっくり返したり、そしてすさ、乾がして。して、切ったものばこんだ立てでおいでさ、こやってすさ、（八の字のように）こやってさ、乾がすんだでばな。してこだ、下のほづ、上のほづたげ乾いだらまだ反対っこにして、うん。そえてやって、でぎでまれば、こだジチャもほんだばって、こだ若げ人だち はごぶじ（ず）や。そって。そうそうそうそう（溜池の中で立てて乾かすんです）。だんでなんも水ぬぐなってるんだはんでしさ。や、はえどご野原みてぐるんだはんで。うん。そういうこと。」主人（L氏）「みな個人個人にろう。切たやづ、こうやてさ。乾がして。してこだ乾いだ頃なれば、これまだとくらがしてまんだこうでやてさ。切たそごの現場にいでな。」主人「天気相手だどごでよ、失敗つうごどはねえでばの。そのかわり、乾いでまるまでして置くだもんほりや。」夫人「いだけ乾がねうちあもしたって もでしてしよて来らいねあもん。ナマのまんまで。」主人「盗む人もねえしせあ（笑）」夫人「うん。（運搬には）あら、ショイコってあるんだね。な。むがす。ショイコで。そってくる。（小さい子どもも手伝ったのですか）ちちえ子どもだば…やねえ。うん。まず、なあ。遠いしき、そごが採るんでねだね。ずーっとオグのほうから採るはんで。オグのほうから採るはんで、たげだあさがねばまねだ。」

用途 ▼サルケはロブヂ（囲炉）で燃料として使い、炊事にも使用した。飯炊きは、カギノハナに吊したナベでおこなった。中学生になるよりも前、つまり昭和20年代なかばころには、マキストーブを使うようになった。M氏の出身地である出精では、マキストーブに切り替わってからしばらくは、サルケをストーブで焚くこともあった。このあたりの子どもは吹原の学校へ通った。小中学校を通じてサルケを焚くようなことはなかった。——主人（L氏）「なもや飯たぐず、むがしむがしてへば、こう、木のこうなったやづで、カギノハナで、そやててそれさナベかげで（炊飯もおこなった）。ううそういうごとそういうごと。うう、今ストフ流行ってがらだばそでねばてホントのムガシはほんであたわけや。」夫人（M氏）「あの、サルケってすんず、ストーブ焚ぐようになってがらは使んねはんでしさの。」主人「うう、うう。」夫人「いや、はええうちだばつかさったばってな。はええうちだばつかさったばって。つかさったばって。」主人「（炉からストーブに変わったのは）わが…ねな。オアだあまだそのストフ（その玄関脇に）あらねろ。」夫人「（んやんや……（そんなものまで見せなくてもいいでしょう）」主人「それさこだげんえきつけでろ。うん、げんえき、そさ煙突つけでろ。それでシ焚いだもんだや。してろう、アレだば、下さ火こぼれりゃあまいねはんで、あのタイトルの台敷いで、ただジカだば下にこんだ…そういうごとせあ。」夫人「（ストーブに変わったのは）ワダチちちええどぎだでばの。」主人「んああ、わがねなあ。何十年もなるでじゃあ。わだて今80なんぼも、へばや、んだねな。」夫人「中学校さはるになちゅうづぎだばいっつにねえはんで、多分小学校時代だどもる。わだちな。」主人「学校でもこのブラグのエそのフトだちも吹原さ行ったもんだはでろ。そさ行ったもんだんだ。オレら。うん。（学校でサルケを焚くということは）それだばねでや。うん。」夫人「学校でだばマギたいだえな。オラだちちせからな。マギ焚いだもんだね。」主人「して父兄の人ろあ、みな学校さ行って、してマギき（マキ切り）して、乾がしてしさ、してこだ焚ぐようにしてで、それがまだ生徒だち焚いだんだ。うう。ふふふふ（笑）。」夫人「ワ

ダチせどぎだきや、あれマギこだみなオモデさ干しといで、さあ今度なあ、アギなって雨降るな、だばアレだはん
でってこだ、生徒みなしてこだ手わだして入れだんだあ。ふふふ。マギば。」

操作 ▼サルケの熾の上に次のサルケをのせておくことで火を持続させた。夜寝るときには、熾の上に灰を被せてお
き、朝まで火種を保った。サルケは細かく裁断するとすぐに燃え尽きてしまうので、そのままの大きさをくべた。
——主人（L氏）「してろう、ロブヂ、あの今だけにストフながつたどごで、そのそちアグこあるでばの、それさこ
んだこやて置くわけや。へば朝ままで、へや火ついぢゆうどごで、それまんだ利用ひてそれさまんだこうかげるわけ
さ。うう。こう被せておく。うん。」「（サルケは）うう、そのまま。（小切りに）しないしない。それこまぐへばな
もあつけねふてまねもの。」



丸山の集落

副産物 ▼子どものころ、M氏はサルケの煙が目にも染みて痛
くて眠れなかった。しかし、暖かさは何のものにも代えがたい
ものだった。家中がススでまっ黒になり、梅雨の季節などは
湿気のためにまっ黒な水滴が垂れた。しかし煙が目にも染みる
苦しさに比べれば問題ではなかった。——夫人（M氏）「そ
れはねえね。それはオラだち学校さ、学校さなあ、何年ぐれ
えだべな。アレ焚げばさあ、目さ染みて、目いでしてな。（情
感を込めて）寝らいねんだあ…。うん。それでも、あつたば
あつたわけ。だばて燻るつきや。したどごでガパドこの柱で
も何でも真っ黒になってまって、こんだ雨。降るべ。へば今
度そればしき、たつて（垂れて）来るんだじゃ。うん。あの、
何てすの。湿気持って。な。大変…だったんだ。それ（垂れ

てくる黒い汁は）だつきや大変でねばて（とにかく煙が）目さ染みてやあ、寝らいねんず。困ってたよ」

▼サルケのニオイは着るものすべてに染みついた。しかし、まわりがみな同じなので気にならなかった。ニオイに
ついてからかわれた経験もない。——夫人「ニオイもある。たはんで着てらものみなさ、みんなサルケ焚いでればみ
んな、みなそう着ちゅんで気にならねであたけども、ニオイはある。あつたもんだ。」「町さ行くづどごあそうまだ
ねえね（笑）。病院さ行くだけだもの（笑）。（だから、町へ行ったときに独特のニオイについて揶揄されたというこ
とは、町に行くこと自体少なかったの、ありませんでした。）」

その他 ▼サルケを切って深くなったところを「キリパ」と称した。水が溜まると段差が見えない。L氏は子どもの
ころ、遊んでいるときに落ちて死にかけた。「死ぬところだった。水の中で、目から星のようなものがチカチカと見
えて。近くに中学3年生くらいの女の子がいて、抱きかかえられて（助けられた）」と語る。当時、L氏を救助した
女の子はL家のとなりの家に住む女性だが、すでに他界している。——主人（L氏）「うんそれろ、それがしたんで
さ、そのサルケ切たどご、どつこうふけくなつてあずつと上だもんのお、つづだけんでえ。それさしたんでろあ、
水いばい溜まれば、その採たどご分がねどごでそれさ、足おどひゃワア死ぬどごしたつて。『キリパ』てしきあ、
うん。もどもど切って採たどごだどごでろう。そごへぎよりこうふけえわけさ。それこんだ、あだりめえこのたげ
えどごもあるどごで、そのつもりではけで行ったばつて、すさ落ちれば、スポンてうつて（笑）。うん。（子どもの
ころに）遊んで。」「なも泳いだだねえ、しぐいどご、たげえどごずつとこう行つたばたて、こちに、このふけえど
ごあるづ分がねえでしき、水きしりしづもしんでえもんだ（溜池の水を放流してしまっている、ひどいもんです）、
死ぬどごしてや、へばや、この水のながいればや、まんなく（目）がらる星みてやづ、ピンピどこう出はるもんだい
ろ。うう。助けらえてして、その隣にや、中学校三年生ぐれえおえのオナゴワラシあただねえ、ひえまだ小学校のと
ぎだばしき、うん、それしたきや抱いでしき、ほあごろさあげで、オエ寝つたままであつたねろ。今何十年もめで
ばの。」

▼丸山溜池へは、各家から下へと降りて行く細道が幾筋も通っていた。その道を通って、洗濯をしに行った。井戸
水を汲んで来るより楽だったからだ。丸山に嫁いだころ、すなわち昭和38～39年頃、まだ洗濯機はなかった。——主
人（L氏）「したてこのエあるべえ、そごすぐ下りパあるんだんだ。どろついで。そのエの下に。そごで下りで行け
あすぐタメゲだどごですせあ。（下りの道は）何か所もあてたね。」夫人（M氏）「ムガシだばせあ、センタグしに、
あの…濯ぐにほら、そごさ行って濯いで来て、センタグもやったもんだよ。したて、あの、井戸水だどごで、汲まね
ばまねつきや。したどとですつあ、そごさ、タメイゲさ行って、濯いで来たもんだの。うん。」主人「今どムガシ全
然違つてな。」夫人「今だばなもな、あさがねしてもいいはんで」夫人「オエとにがぐこさ嫁に来たづぎだば、セ
ンタグキもねしてあつたんだはんで。したどごで（溜池に洗濯しに行ったのである）。50…50何年めえ。」

▼出精で育つたM氏は、子どものころ出来島の海で泳いだ。川で泳ぐよりも体が軽くなり楽しく泳げたという。い
っぽう、丸山で育つたL氏は、海は怖いという。出来島で泳いだことはない。——夫人（M氏）「オアだばそえでも

おばさんいりどごで、デギシマさ遊びにいげば海で泳いであな、たんだ、川で泳ぐよりいいもんだ。軽くて。（塩水なので）軽いんず。沈むつうごどねんだでばの。たんだいいもんでねした。」／主人（L氏）「みな、女のふともみなすいそぐで水泳ぎした、デギシマちけばたて、あづまでいげば海だばおかねきゃあ（笑）。波。デギシマさいて泳いだごとねしたね」（2016年8月27日取材）

⑭ N氏 昭和12年生(81歳) 女性

来歴 ▼稲垣豊川の出身で、昭和31年に丸山に嫁いだ。

呼称 ▼サラケと称した。

使用年代 ▼出身地の稲垣ではサラケを使っていた。サラケを重ねて乾燥させ、ニオのように作ったのを覚えている。まだ子どものころ、昭和10年代後半から20年代前半の記憶である。当地に嫁いだ昭和30年ころ、丸山でもサラケを使用していた。しかし嫁ぎ先はすでにマキを使用していたため、当地でサラケを使った経験はない。稲刈りを終えると集落総出で「木伐り」をした。国有林以外の土地から伐り出した。現在畑になっているところは、もともと木があった場所である。伐った木は各家に分配した。不足分は各自が鱈ヶ沢方面から買った。木の伐採が進むと伐れる場所がなくなってしまったが、その頃には石油ストーブの時代になっていたという。——「ウチではもうない。その前だばあったがしらねえけどワダシここさ来てがらだば丸山さ来てがらだばサルケ焚いだごとねえ。うん。ウヂでだば。（こ）も焚いでだばあったもる。こごもな。うん。木ば、マギであったどごで。うん。だつてワダヂ小せえどご、稲垣にいだときしたんで、小学校2～3年生ごろだべあな、その当時だば、やっぱりサルケ、うん。小さい子ども心に覚えでもの。親、あのサルケこう重ねで、さやってその、うつき運んで、こうニオにこう作たりしたのを、冬にこんだこしてやった子ども心にだば覚えでら。そうそうそう、乾がしたの（をニオにして）な。そのこう作りかただのやりがたの、だのだば子どもだんでわがねばって、話は聞いたごとあるでばの。実際そういう作業さだば携わったどごだばねえ。（手伝うことも）ながった。ちいせものまだな。だんでそういうのさ携わった仕事すてへばやばり現在92～3ごろの若いもんだのそういう人だば携わったんでねがな。うん。私も今こごさ来てがら60年もなるけども、私こごさ来たどごサルケこごで焚いでねしてあったね。うん。こごのウヂだばな。うん。ま、やってる、そごでそのタメイグがら上げだもんだつてらんでやった人だば使つてやった人だば何軒があるんでねがしたつてホラ、木、こごさ実際来たどごだば、サルケだばねして木焚いで。マギ。」「マキは今この今だばこの山ずーっとまづ伐採して土地わけでアレしたばつて、その当時だばあのプラグでこして切たんだね、切て。ワダヂ嫁になつてこちや来たどごだば、アギこう、お稲の作業終われば、『木伐り』つてそしてほら、わけでしごどしてみんなして共同作業して、一軒でなんぼなんぼつてそうしてわけで、で足りない人はまずそちの鱈ヶ沢だのそちのほがら買って来て焚いでしてね。うん。そうそうそうそう。そしてやったもんだ。」「うんそうそうそう（この周辺から伐つて）、今ハダゲにしてらどごみな木であったもんだね。今だばずつとこう山入つていげば、ハダゲなつてしまつてるばつて、国有林以外だばほら、みんな、伐つて、木伐つてハダゲにして土地わけだんだでばな。うん。うんそれをまず木、『木伐り』つて出はつてホラ、一軒さんボナンボつてやつて、それを焚いであつただ。してそれだんだんそれねぐなつて、山に木ねぐなつたどごで、けつきよぐそうなつたつきや今度あセギユのストーブ出できたじゃな。うん。サルケのごど覚えじゅ人てばやばりうん、90以上の人でねばそういうサルケを採る掘るそういうごど覚えじゅ人だば、90以上の人でねばわがねでねな。うん。」

分布・質 ▼N氏は豊川出身であることから、筆者が3年前にお話を伺った豊川の××氏を知っている（拙稿No.39, pp. 77-78, 稲垣豊川②A, Z氏, 昭和3年生）。その年代であれば、作業の方法も知っているだろうと語った。そして、豊川では集落のある近辺ではなくハダチのほう、すこし離れた北方へと行って採取しただろうという。——「せばあそご（豊川の村落ではなく）ハダチのほうのヤツ（藪）のほうさ行つたべ。そうそうそう、んだんだ。あつさみな、ハダチのほうのヤツさまず行つて切つた、んだべ、そうそう。××（人名）覚えでら。したんであのトシの年代の人だばやっぱり作業もやつたごとあるべ。したんであの人だちの年代ぐれでねばだば掘りがだだば丸山だばどんだべえ…。ワ来たどごもうサルケ焚いでねしたつたもんな。」

乾燥・運搬・保管 ▼当地に嫁いだ頃は使用していないのでわからない。出身地の稲垣では積み重ねて乾燥させている光景を目にした。

用途 ▼サルケの採取そのものについては、携わったことがないので分からないが、生まれ育った稲垣ではイロリヤストーブでサラケを燃やしたことを覚えている。当地へ嫁いだ頃は、丸山でも稲垣でもマキストーブを用いるようになっていた。丸山ではマキしか使用していないが、稲垣ではストーブでサラケを燃やしていたこともあった。——「私、の、時はまだサルケだのつて掘つてねし…やつたづわがね。小さいどご、焚いだごとだば覚えであばてそれ上げて乾がしてこして燃料にしたごどだのだばやたごどねはんで分がらねえどういうふうにしてやったもんだが。うんやばりそういうごど覚えじゅ人だば85～6、90代の人でねば分がねでねな。いやオラもちょうど今80だけでも、そういう

作業してサルケ作ったごどだば、小さいどぎ、イロリさこうサラケ入れだりストーブさ入れだりってやったごどだば子どもごころに覚えていやあばって、サルケにした材料作ったのだば分がらねえ。乾燥したりまず、乾燥したりすだであな。うんうんうん。そういうず覚じゅう人だばうんだねの、90ぐらいの人だば実際こうやったりしたんでねべがの。「稲垣でもやっぴり湿田あったがどヤヂ、ヤヂだであの。うん、やってオアだぢうん、小学校3～4年のあだりだべなあ。その当時だばサルケやっぴり子ども心に覚えてら。だばて、どういふふうにしてやったがどがそういうごどだばわがらねえ。いや、親がら聞いだりしてたばって実際そういう作業さだば携わったごどねえ。」「(嫁いだ頃は) そうそうそう。うん、こごでだば(その時はすでに) ストーブであった。うん、マギストーブであった。ダルマ式みたいなストーブであった。オラダヂ育ったドギだば、うん、イロリであたづ。こさ嫁になって来るになつたら、稲垣のほうでもストーブで木焚いで。あづのほだばこの東山がらなづにこう木なんぼはりてこうして木、冬焚ぐ分のづ買ったもんだね。買って来てあづべで。山ねどごで。」

▼昭和31年に嫁いでから2年ほどはツルナベで炊き、その後はツバガマが流行した。マギストーブの上にナベやカマを載せて炊事した。現在50歳になる次男が生まれたころ、すなわち昭和36年ころに電気釜を購入した。その電気釜はスイッチひとつで炊飯できたが、保温機能はなかった。当時、電気釜が流行しており、木造町の秋田谷電気商会から購入した。石炭ストーブや籾殻ストーブを炊事に使用している家もあった。——「ご飯炊ぐそのマギストーブでご飯炊いだだ。うん。最初、鉄釜みたいの(ツルナベ)で二年ぐれえ炊いで、それがら今度ツバガマって流行ってツバガマ。おっきなあづうフタのアレでツバガマで、うんツバガマでやった。最初だばナベ、ツル付いだナベで(ナベをストーブにのせて) ご飯炊いだな。うんムガシのごと思えばんだ。そうしてやった。それがらツバガマ出で、ツバガマやって、子ども…二人、二人だぎゃ、いま50、にな、にな次男生まれだあだりその当時なつたら電気釜ずもの流行って。うん。もう電気でこう。うん。ただボダンただ一つ、炊飯てボダンひとつこう押すだけでなも保温もなもねえあの、電気釜になった。次男生まれだころ電気釜になったんでねべがなあ。36年生まれでねがな分がねぐなつたじや。うん。36年頃だ。」「当時もううっと木造の秋田谷電気商会ってやってあつたどもるそごがら買ったどもうよ。うん。電気製品。ま、その当時でもこごいらでもお金ある家だばセキタンストーブでやったり、このうんと籾殻あるべ、籾殻ストーブ、ワだちウヂにいだどぎでも籾殻ストーブだのってやったりしてあつたもんだよ。ダルマストー(ブ)長ぐなつたえさ、籾入れで、籾殻入れで、火つけで、そうそう。籾殻でやったりしたウヂもあつてあつたばって。こごのウヂだばマギストーブ、マギばりで。な。うん。」(2016年8月27日取材)

⑮ O氏 昭和29年生(64歳) 女性

その他 ▼昭和20年代末に生まれたO氏は、昭和47年頃に丸山に嫁いだ。すでに丸山ではサルケが使用されておらず、過去の話として聞いたことはあるが、経験はない。「うーん、(サルケは) きだごどあるばって、そういうのがらねえな。」「(嫁いだ当時は) 焚いでない。」「(嫁いだのは) まだ…十代のとぎ(18～19) だはんで。うん。たげ歳とつてればさ、そつつのほうの人さ(聞いたほうがいい)」

▼丸山では、「知らない」と答えた年配の人が他に数名いた。

⑯ P氏 昭和36年生(57歳) 男性

来歴 ▼昭和36年生まれP氏は、サルケについて聞いたことがある。小さい頃は、丸山の溜池の水を田の用水に使用していた。水位が低くなると陸地があらわれてきて、サルケを掘った深い場所、すなわち「キリッパ」のたまり水にひそむ魚を釣って遊んだ。溜池以外も見渡す限りの湿地(カヤヤチ)で、キリッパが至るところにあったという。キリッパを含め、出来島から砂を持ってきて湿地を埋めた。フワフワとして堅いサルケを乾燥させていたことを覚えている。すなわち昭和40年代前半ころまでは、そのような光景が見られたということである。P氏の20代の息子も、「サラケだばヤヅ(菴)でねな(サルケっていうのは、湿地にあるアレでしょう、知っていますよ)」という。年配の方でも知らない場合(事例⑮)もあれば、このように相当若い世代でも親から話を聞いて知っている人もいる。

呼称 ▼サラケ・サルケ

使用年代 ▼話から、昭和40年代前半にも使用されていたことがわかった。

定義・分布・質 ▼カヤの根のようなもので、軽くて堅いもの。根っこを切ったものを乾燥させたものがサルケである。このあたりは泥炭地だと認識している。

入手法 ▼田や溜池から採取した。——「ワー小せえ頃はこの辺さサルケ乾がしてらやづだば覚えてらけども、うん。泥炭地だどごでそれ切って乾がすんだげどもな。ワーダヂだばあまりこう、分がねえな。やっぴり80代の人、こごで生まれだ人だあ覚えてら。うん。ワダイちせ頃はあつたや。たすかに。今50ぐらいなるけども。(掘ったところは) キリッパ、そうそう。ほらタメゲ、今水張ってまてるけどな、前はあの、この水用水として田んぼさ使つてあつたんだいな、オラちさい頃は。今はホラあの、川のポンプ、みなポンプで、キジョウキでカイジョウキでやってや。でも

ムガシは、ま、水てへばタメゲがらほらここの部分おどしてそれ足したんだでばな。ひゃこう、水すぐねぐなればさ、ま、オガ見えでくるわけや。してこう、切ったりして。だいいちその津軽新田てみはえどごカヤヤヂ、ヤヂであったわけさ。わーみなころ。この世代（息子を指して）わがねけどな。全部カヤばかりおがってあったんだもの。それでやっぱりあら、カヤのネッコみてずあってな、かわがねあフアフアかでえもんだんだ。それかわがしてあたんづあ覚えでら。」

その他 ▼サルケを採取した跡地（「キリッパ」）がたくさんあった。釣りをして遊んだが、泳いだことはない。出来島から砂を運び、客土した。——「（キリッパで）釣りやったごどある。深くなってる。泳いだりだばしない。」「ムガシこの下にもこう、今だはんでこう、クロ打ってまって、田んぼあるたばって、キリパぱりあもんだね。サルケ採ったごどでばな。うん。で、ま、あこ、津軽新田でまあ、あの、西のデギシマ（出来島）とがあつがら砂持ってきてヤツ埋めでまってあでばな。でキリパてねぐなてまたわけや。全部、見渡す限りオラ小せえ頃。あの、カヤ、カヤヤヂであったヤツであたでばの。ヤツのケッキョグ、あれ泥炭のネコ切ったやづごど乾がしたやづがサルケだでばの。」（2016年8月27日取材）

⑩ Q氏 昭和7年生(86歳) 女性

来歴 ▼昭和30年に越水から当地へ嫁いだ。昭和2年生まれの人主人はすでに他界している。

呼称 ▼サラケと称した。

使用年代 ▼Q氏が嫁いでから2～3年ほど、つまり昭和30年代前半頃にはサラケを使用していた。

入手法 ▼溜池から自家用に採取した。

採取の目的 ▼イロリで使用するために採取した。——「（溜池から）ホラ切て、それごそ今だばストブだけでもムガシだばイロリさホラな、やったごどで」

採取の時期・場所・主体 ▼溜池から採取した。（舅がいなかったの）姑と昭和2年生まれの人主人が採りに行き、自分自身は関わったことがなかった。——「サラケ、うん覚えでる。うん。こごさ来てがら聞いてけども、それごそあのだ切てアレだでばの。嫁に来てがらそつから（溜池から）ほら切て、それごそ今だばストブだけでもムガシだばイロリさほらな、やったごどで、うん。だがらそう詳しいってごどは、ただ切て火つけでらってごどはそれ、聞いてるっただけで、うん。だがら嫁に来てがらまあ2～3年はやったけども、まだ嫁になんねえどぎだばアレだでばの。ズカ（実家）でだば。うん。（実家は）越水地区だけでも。あのミズダデってすごだけども。（越水でも）うん焚いでる。（実家でも）焚いでら。うん。」「うーんわだしはホラなも分がないけども、うん。嫁に来て2～3年はウヂでも切ったけどもワダシは行ったごどねえうん。（当時は）おぢいちゃんがいながったの。だがらおばあちゃんどワダシの（昭和2年生まれの人）旦那。ワダシだちよりも歳とった、90位の人だちだばそれでも、はきりわがてるがもしれねあ。」

採取法 ▼自身が採取したことはなかった。四角形に切ったものであることは覚えている。——「したけどもどういふふうにして採ってるもんだがしらなんもワダシたちはわがねでばの。（手伝いなどは）全然。うん。何ていうがこうシカグに切てほれ。手でやればボサボサどこう取れるっていうがアレだでばの。」

用途 ▼シボドでナベを使って炊飯し、燃料にはサラケを使用した。マキストーブを使用するようになってからは、ストーブで炊事した。そのころは、ムラの者が総出で木を伐採した。それぞれが伐った分を積み上げておき、その後の抽選によって、積み上げた盛りごとに分配された。嫁ぐ前は、実家の越水でも、イロリでサラケを焚いていた。——「（嫁に来た当初は）2年、3年ぐらいアレだべが、焚いだべが。（シボドで）んだんだ。（カギノハナにナベ）やってな。ご飯しながらそのナベで焚いだでばの。マギ…マギていうが木ていうが山、山がらほら、み、ブラグの人だちみなあの出で、木を切て、それを今度みんなでまだ分げるわけ。その木。うん。それごそ、ワダシ切たのはこのぐらいたということこ盛りにして置でぐべ。たごでそれをクジで、誰の切った木が当てるがわがねわけさ。くじ引きでその、山の木。でそれで火焚いで。うん。ご飯炊いだでばの。うん。その切った木は（くじ引きで）ね。それでやった。」「（2～3年サラケをシボドで焚いたあとは）うんそう、マキストーブ。うん。（炊飯は）いやそのストーブで。ナベで。うん。まあさまだごどだあしたような。ムガシの人て。うん。90過ぎの人だば、でこごさ生まれだ人だばアレだでばの。サラケ切たりして分がてるでばの。」

操作 ▼マキに火をつけてから、その火でサラケに着火した。サラケは一気に燃え上がるものではないので、四角に切ったサラケ一枚があれば、長く火を保つことができた。2～3枚で一晩中暖を採ることができた。——「そうそう。うん（炊飯ではマキとサラケを混ぜた）。それごそ、火ついでがらサラケ今度や、つけるだでばの。」「サラケてこう四角に切ったのでそれ一つあればあ、けこう長ぐ焚ぐにいいわけさ。ボウボど燃えるもんでねえどごで。うん。たごで、それごそ一晩寝るまでしてても2枚が3枚、3枚だのってだけあ使んねえな。結構暖まるアレだね。」

副産物 ▼煙は眼に染みた。独特のニオイもあった。しかし、それが日常の当たり前の暮らしだったので、それほど

苦にはならなかった。——「うん。煙出ながらアレだけでもな。(眼に) 染みねえわけねえべどもなあ。それでもそんなに苦にならねえふて暮らして来たでばの。まあ、何ていうがこう、ちょっと変なニオイはするよな。でもそれがしきたりになってしまっていたがら…。」

その他 ▼家の裏から、丸山溜池に下りて行く道があった。子どものオシメなど、溜池で洗濯物を洗った。——「(家の裏を下りれば溜池に行けないことはないが) でも今はもう草ボウボウで生えでるがらさ。うん。(洗濯は) うんやったやった。子どもたちのオシメとがごさ下りていって。タメイゲで、アレだ。洗ったよ。汲んで来るつつうごどはながったな。うん。それこそ田んぼさ行けばセギに水いっぺあるとごで、そごで今度あ洗ったりな。うん。」

(2017年8月27日取材)

⑩ R氏 昭和9年生(84歳) 男性

来歴 ▼当地で生まれ育った。

呼称 ▼サルケと称した。

使用年代 ▼小さい頃、すなわち昭和10年代にはサルケを焚いていた。周囲でもサルケをみな使用していた。しかし、サルケを掘る手伝いをしたことはない。サルケについては、90歳以上の人でなければ分からないだろうと考えている。石油ストーブの時代になってから、マキを使用するようになった。——「なも分がねえなあ。まあオラ歳いってらはんでサラケのごとだあ聞いだごとあるばって。あまり詳しくねえ。(サルケを切ったことは) ねえ。うん、ムガシだはんで焚いだ記憶はあるよ。まあ、さままだもんだの。今ワァ80過ぎでるもの、それこそちっちょどぎだものなあ。トシ行ってら人だあ焚いでこうな、切ったり、今だばそういねぐなったなあ。(手伝いをしたことも) ねえ。ムガシだあんだいな。みんなサルケ焚いだはんでなあ。それは詳しくねえ。んい。トシいった人だばまなあ。トシいげばいたでろあ、ホームに行ったり、ながなが。(聞くのに) いいいねんでねがあ今だば。全然分がらねえなあ。」「マギも焚いだ、みな同じでや。マギも焚いだ。マギも焚いでだな。マギ。今このセギユの時代になってからマギだばみなマギ焚いだけども、どごの人でもうん。そんな詳しくねえな。うん。トシいった人だら分かる。トシいった人って恐らく、今だらないんでねえがあ。ホームに行ったりさ、うん。今だいたい90過ぎもなったりとがそういう人だば、ずっと前から覚えで。うん。どごのウチで聞いても答えは同じだと思ふ。」(2017年8月27日取材)

⑪ S氏 昭和10年生(83歳) 女性

来歴 ▼昭和30年に菰槌から丸山へ嫁いだ。サルケについての話は菰槌での経験である。

呼称 ▼サルケ、サラケと称した。

使用年代 ▼出身地の菰槌では、小学校高学年から中学生のころに使用していた。昭和30年に丸山へ嫁いだときは、嫁ぎ先では使用していなかった。

入手法 ▼親がサラケを掘る場所から採取。

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼小学校高学年～中学生のころ、すなわち昭和20年代前半ころ、親に連れられてサルケを掘る場所へ行った。父親が採取して水から上げたものを、ハの字に立てて乾燥させ、ある程度乾燥したのちにひっくり返して積み上げる作業を手伝った。——「聞いたことない。サラケ。ってあの、燃やすんだの。オラ子どもの時だば、あの、隣村のコモツヂ(菰槌)ですどごあってあの、その時だば、そういうサルケだのって、子どもの頃よこでえのチヂオヤそごさ連れていって掘ってオラダヂにこう干させでな一枚ずつこう、ひっくり返したりしてそういうアレは知ってるばたって、こごのとこだば丸山さ来てからだばそういうの聞いだもことねえし見だこともねえ。うん。」「ある。ちっちゃいってまあ、まだ、小学校か中学校の頃であったべねの。うん。それだば見だことあるの。したんで、一緒に連れで行がれで、掘ったのあ水がらざ一とこう上げだのを、こう、こういうふうにしてこう、三角にこう立で、立でで干したりしたの、それたげ乾いでくれればまだこう、ひっくり返してこうまぐ(積む)みたいにとかってそういうのはやったことある。うん。小学校、小学生、小学校の高学年の頃…。(運ぶのは) そういうのはやったごとねえのお。」

採取法 ▼一尺四方、厚さ10cm程度に採取した。——「(乾燥させる前の大きさは) ガラス一枚ぐらい…ガラスで今だばアレだばって、まずこんなもん(一尺四方)だべが。もうちょっと高さこれぐらいあるべがの。大ききで。」

乾燥・運搬・保管 ▼三角形に立てかけて日当たりのよい場所で乾燥させ、数日かけてある程度乾燥したのち、積み上げて干し、ひっくり返す作業を繰り返した。その後家へ運搬した。使用するときには更に小割りした。——「それ(一尺四方に切り取ったサルケ) ごとばこう、こういう風にして、三角にこう、立でで干して。陽が当たる場所に。こう干しておいで何日かして乾いだころにまだ行ってひっくりがえしてくるってそうかわ、その乾いだのを、今度ウチさ持ってきて、うん。…厚さこのぐらい。ま一ず、このぐらい。10cmぐらいの厚さで。(それを) 小切りにして、まだ

燃やすときは。うん。」

用途 ▼シボドでサルケを焚いた。大きなシボドを囲み、ヨコザには父親が、そのほか母親、孫婆さんがそれぞれの座にすわり、自分を含めて子どもたちはその間に座った。シボドの縁の内側には防火のためにレンガが巡らされていた。当時は靴下はなく足袋を穿いてはいたが足が冷えるので足袋を脱いでシボドに足を入れ、レンガの上に足をあげて暖まると、父親が『あすながめでこの行儀わりい！』（足を伸ばすなんて行儀悪いぞ）と、足を火箸で叩かれ、叱られた記憶がある。ちなみに炉に足を入れて暖まることについては、『津軽口碑集』（昭和4年）には次のようなくだりがある。「炉の大きさは畳程あり。草鞋（わらじ）ばきの足を暖むるに便なり」。シボドにはカギノハナがあり、ヤカンの形をした鉄ガマのようなものを下げてあった。炊飯はレンガを積んだカマドでツバガマを使っておこなった。カマドの燃料には山から拾ってきた木を使用した。——「ワダヂ、まずシボドあるでばの。うん。シボドだっけかなり大きでばの。このぐらいのシボドで、そしてそごさみな、ヨゴザってあって、お父さんのイヂパンの、その家族の



シボドに足を入れる（昭和31年、県内）佐々木直亮氏撮影

イヂパン、あの、うん。で、あのチヂ親がそごさ座って、あど母親座って、孫婆さんもいであつたどごで孫婆さん座ってその間さワアだちこう、座ってもらって、とがってして、その、シボドのナガさレンガ？レンガこう置いて、置いだりしてそのレンガさ足つ、ワダヂ子どもだちの頃だば足袋、足袋ってあるであの。足袋履いだりしてクヅシタとがそういうものもねしてあつたはんで、足袋履いででも、その人だちだばまだいいほうであつたでばの。足袋も履げね人もいであつたでばの。足袋履いで、晩、夜になればオラバンゲバンゲってしての、夜になれば、あの足冷たいどごでさ、脱いで足さこう、シボトさ足入れて、その、レンガの上さだのこう足こあげてそしてあだたりせば、チヂ親にかて行儀わり

て、火箸てすんだがこう、あつたんず火箸でこう足ただがれだいでしての。うん。そういうキオグある。」「うん、（レンガは足をあげるためのものではないんだこのあの、シボドそれごそシボドのワギが木だどごであぶねはんでレンガこうまわしてゐるんだばって、そのえ（上）さこうあす（足）こあげだりすであすな、『あす（足）ながめでこの行儀わりい！』ってこう、の、そういう覚えは、あるの。もうホントに子ども、小学校、の4～5年生あだりってばいが3～4年生っていばいがの。」「そうそう、カギノハナやってそれさあの、今だばヤガんですだばってカマ、あの鉄ガマ、鉄ガマみただの、上げで、テドリつんだがの、よぐ覚えで。勉強してきたの？んだいなこの若さでムガシのの。えの息子だちだきやテドリだのでも知らねべおんそういうコドバも、うん」「でご飯炊ぐづでも人普通の今だたけにこういのでなくてテドリガマだが、テ、…うん。ナベで炊いだ人もいるがもわがねばって、やっぱあの、ツバガマつんだが、こう、こういう釜さこう入れて、あの、木のフタ、フタは木のフタで厚いフタで。ツバガマ。うん、そご（菰槌）だば丸山もどごも、あの、ちょっとしたウチでだばあつたでねべが。うん。ツバガマを、カマドで。なも（自分の家は）オオヤゲでだばねえばって、うん。オオヤゲでだつきやねんだばって、あの、レンガこう積んだカマド、うん、レンガのカマドで、こうそごさボンと乗せて下がらこう、木で火、火炊いで。（燃料は）サルケでなくてたんだ山から拾ってきた木。木だとか、あの、ふつに切った木を割って。木で炊いだ。みんなそれごそごのウチによって違うども。ワラ焚いでマ、あのママ炊いだ人もいってすすの。」

操作 ▼山から拾い集めた杉の葉を乾燥させたものの上に、小割りしたサルケを置いた。そして杉の葉に火をつけた。——「うん、それは知ってる。うーん。ロバタ…その頃だば、ストーブもなくて、こういうロバタに、こういっぱいあつたのに、あれこう、サルケ、に何か山から何てすのこういう木の、うんと、マツでなくって、あの何だつきやあれ…。杉？杉の葉っぱ。そういうのを乾がしたのをこう下に入れて火をつけで、こういうふうにして、こう、立てで。うん、それごとば燃やせばとにかく煙だば出るでばの。」「（すぐに火が）つぎます。乾いだの、乾いだの。みな小さくこう切つての、ま、こ、このぐらいのシカグぐらいに切たのを乾がしたのを、まだこう割ってこう、一枚ままそうやねでちっちゃぐまだ切つたのを、まだこうやって。そういうアレは、キオグがあります。」

副産物 ▼昔はどの家にもハッポウがあつて煙は排出されてはいたが、屋内にはサルケの煙が充満した。モクモクと煙があがり、目が痛くなった。だから昔は「メクサレ」などといって目やにが出る人も多かった。ニオイについては、どの家に行ってもみなサルケを焚いていたから、気になったことはなかった。——「煙はすごい。たつてムガシのうちって、あのみんなどごのウチでもカヤヤ…カヤ屋根つんだが、カヤ葺きのこうなつたの、そういう屋根で、何つもの。な、こう、は、は、屋根の上にかう、ハポウ、ハッポウてすんだがの。今だばコドバも忘れだばって（笑）。」「モクモクモクって上がって、目も痛くなるでばの。たんでムガシの人ってよぐあのなんつんだ、うん…目やに出だり、うん。メクサレてえばそてらんでせあ（笑）。」「ニオイどんだべえ。たつてその頃だばみんなどごのウチさ行つてもそんだどごで別に気に、気になるようなアレではねしたつたんであねえ？」（2017年8月27日取材）

⑩ T氏 昭和11年生(82歳) 男性

来歴 ▼横浜(神奈川県)で育ったが、9歳のときに終戦となり、家を継ぐために郷里へ戻ることになった父親とともに当地へ来た。横浜ではパンやチョコレート、チュウインガムなども食べていたし、長靴もあったが、当地ではまだワラジか裸足で歩き、サラケを焚いているような生活の違いに驚いた。——「そうそうそれまで私横浜にいたからね。でウチのこちのオヤジが終戦、この跡継ぎであたごで、それでまあ来たわけですよ。ええ。だら生活全然違ってだわけですよ。横浜がらこち来てびっくりしたし、うん。そのあたりもちろんナガツなんがそういうのがあったし。みなこちきたらみなワラジだってみな裸足だもの。ね。うん。(パンなんかも食べたり)してましたね。ちょうど終戦後だごで進駐軍の、戦争負けでいちねんごさ来たごで進駐軍入って来ているんなもの出はって来たしねチュウインガムとかね。チョコレートが。そういうの食べだごあります。」

呼称 ▼サラケと呼称した。

使用年代 ▼T氏が9歳のころ、すなわち昭和20年ころ、この付近ではサラケが焚かれていた。しかし20代のころ、つまり昭和30年代前半にはサラケは使用されなくなったようだ。T氏は、自分よりも10～15歳若い年代であれば、サラケのことは知らないだろうと考えている。——「私も終戦後3年生のどぎ来たけど、その時焚いでだごでびっくりして。」「だいたい、私が20代頃はもうサラケですのう焚がなくなっただけだ。」「まずオラより10年…15年わがければぜんぜん分らないと思いますよ。」

入手法 ▼丸山のヌマ(溜池)の底には各家の持ち場(権利)が設定されていた。各家庭に必要な量を切ったもので、譲渡や売買については知らない。——「それムガシあの、丸山のヌマあたりでも、あの田んぼに水な、やってる水なぐなってがら、そのタメイゲのどぎあのみな分割して各個人の持ち物あったわけですよ。自分の持ちがいあったわけさ。どごどごごがらこれからこんき自分だつてね」「そういうのは、それは分らない。やっぱり自分の持ち前だごで。自分の焚ぐ分だけ切ったごで。うん。(切らせて貰いという話は)ないですね。」

採取の時期・場所・主体 ▼7～8月ころ、溜池の水が少なくなり、池の底を小さな流れの筋がいくつもみられるようになると、サラケの採取に取りかかった。ひとくちに溜池といっても場所によって早く干上がるところとそうでないところがあるので、切り出す時期は状況のみはからって決めた。また、現在田となっている場所は、昔はカヤヤヂであったが、そこからも採取した。サラケの採取は「もちろん」男性である、とT氏は断言する。サラケ切りは、父親や祖父など男性でなければできない作業だったという。T氏も小学校4～5年生ころから作業の手伝いをしたが、切る作業そのものについては手伝ったことはない。子どもができる作業ではなかった。——「それはちょっと分かんねえな。(切ったことも)ないない。そうそう(私は丸山の出身です)。そうそう、(家によって)違う。いや、うちの爺さん父さんは切ったことある。私あの、終戦後あちがら引き上げで来た人だごで、あまり分かんないもの。うん。うーん…いやあ、ウツのず(引き上げて来た頃に)焚いでつたな。うん。(手伝ったことは)うん、そうしたごともある。」「ほえて…(ワ)タシあ切ったごどねえ。けど、ウヂのお爺さんの手伝いはしたごどある。(時期的には)だいたいもう、7月…8月ごろなるねえ、うん。そのあたりもうタメイゲなんか水なくて、ちょろちょろとタメイゲのながに川みたいになってそっから流れでるだけであつたわけね。んだ。(切り出す時期は)たんでその条件によって水がないところは早く切るごもあるし。…で昔あの、この田んぼつてすの、田んぼも、今田んぼ作ってますけど、昔はヤヂデつて、カヤ生えであつたわけですよ。でそっからも切ったごありますね。今全部田になってますけどね。昔はだがらそのタメイゲと田んぼの、あの…ぬかり地つてばこう、湿地地帯から、切った、わけですよ。みなわけではありましたがね。田んぼつたつて今、今田んぼなつてムガシは湿地地帯であつたわけ。あの、カヤいっぺ生えだ。」「小学校時代。4～5年がら手伝いますよね。みなムガシは子どもみな遊ぶごつてね結局そういうしか遊ぶつてながつたもの。今だけにテレビあるわけでないし。うんアレもあるわけでないし。うん。」

採取法 ▼サラケを切るときは裸になり、「平べったい刺すような道具」で切り取った。一尺四方、厚さ15cm程度に切って引き上げた。——「(採取する人は)もちろんオドゴです。みなこれくらいムガシなんかゴム長とかそういうのながつたもんですから、みんなハダガで入って、これくらいぬがつて、そしてこの刺すやつつてこう、あるんだよね、こうね。平たいべつたらどしたもんでね。それこうかぶあつた切つて。ちょうどこれくらい、一尺し(ほう)…30cm四方ぐらいかな。厚さはしたはんで…厚さはやっぱりある程度厚くても、干すごで、それをあの…引き上げて切つたらみな一枚ずつ野原に干すわけ。そして乾いでからウヂに持って来るわけ。だがら切るときはやっぱり厚さあれだべなあ厚さ15cmぐらいだべな、で30cm四方。」

乾燥・運搬・保管 ▼切り上げたサラケはその場に一枚ずつ平置きして並べた。乾くまで幾度となくひっくり返した。その作業は子どもも手伝った。乾燥したサラケはナワで10～15枚ずつ束ねた。束ねる量はサラケの厚みによって加減した。ショイコで背負い、溜池の回りを岡づたいに家まで運搬し、小屋に貯蔵した。——「それを一枚ずつずーっとの。並べて、乾がすわけ。ひっくり返したり何だりして。で、乾いでから今度ウチへ持って来るわけ。」「そうそうそう。いやだがらそのサラケ切つてるとごにこう陸みたいにあるごで、そごへ干すわけよ。で、乾けばひっくり返